

日本人と田んぼ (伝統と環境)

夕方暗くなったところに田んぼの周りから鐘や太鼓の音が響いている。高張提灯を先頭に実盛(さねもり)人形と松明が続き田んぼを赤々と照らしながら練り歩く「尾張の虫送り」。虫送りとは、稲につく害虫を追い払い、豊作を祈願する行事です。稲沢市祖父江町で行われている虫送り(写真1 虫送りの松明)は愛知県の無形民俗文化財に指定されています。私は今年の夏、この行事に参加しました。地域の方々を中心に小中学生や学校の先生も参加していました。参加して感じたことは、人と自然との距離が近いということです。田んぼは、私の家の周りにたくさんありますが、普段は見ているだけで直接関わったことがないことに気づきました。

家に帰ってからその話をすると、父が「自分が子供の時は、畑とか、田んぼの手伝いしてたけど今は機械がないと大変だから他の人に田んぼを貸してるんだよ。ここら辺の人は大体そうだと思うよ。」と話してくれました。

田んぼに関する行事は、虫送りのほかに、雨乞い、御田植祭、新嘗祭などがあり、田んぼが日本人にとって身近なものであることが分かります。

昔、当たり前に行われていたこれらの行事は、今ではほとんど行われていません。日本人にとって弥生時代から身近であるはずの田んぼ、いつからこのように距離が開いてしまったのでしょうか。



写真1 虫送りの松明

世界全体の穀物の生産量は増えていますが、安定して供給されているかというところではありません。日本の食料自給率は先進国の中で最低水準ともいわれています。そんな中、農薬や除草剤、機械を使わずなるべく人の手で手間暇をかけて育てるといったことは容易ではありません。農業の後継者不足、高齢化なども問題です。

現代の田んぼは「工場」のようになっています。より効率的に行われ、利潤を得るための場になりました。昭和初期から普及した農薬、戦後の土地改良、作業の機械化により農

作業の負担が軽減されました。この頃から、人は「自然」と距離を置くようになったのでしょうか。「生産性」を重視するあまり自然に対して無関心になってしまったと言うべきでしょうか。

このような悲しい景色（写真2 学校前の田んぼ）をみたことがありますか。田んぼの周囲の畔は茶色く枯れて、除草剤が使われていることが一目でわかります。人間には害がなくても、生物にとっては成長を妨げるなどの悪影響があります。このようになっているところが少なくないのです。



写真2 学校前の田んぼ

皆さんは「めだかの学校」を覗いてみたことがありますか。「春の小川」にれんげやすみが咲いているのを眺めたことはありますか。今、そのような日本の伝統的な風景が消えかけています。

自然の保護と人間の生活の安定を両立させることは果たして可能なのでしょうか？これは非常に難しい問題だと思います。しかし私たちにも、消費者としてできることがあります。無農薬の野菜を買うことを心掛けることです。ほんの小さな事かもしれませんが、そうすることで農家さんの手助けになります。コウノトリとの共生を願い無農薬でお米を作ったところ、それがブランド化され農業として利潤も得ながら環境を守る、といった大きな成功につながった例があります。このようなことを実現するためには、農家の方の努力が必要です。しかし私たちの意識も変える必要があるのです。形が見事にそろっている野菜が当たり前だと思っていませんか。虫のついていない野菜が当たり前だと思っていませんか。それは、農薬のおかげであって、本来はあたり前のことではないのです。私たちは農薬のある環境に慣れてしまい、本来の自然を忘れているのです。

祖父江町のヘイケボタルが減少した理由について、農薬の使用の他、土地改良による環境の変化や道路改修、街灯の設置などが挙げられています。人間の生活が便利になるにつれて、他の生物にとって棲みにくい環境になっていると考えられます。しかし生物のために田んぼや畑に農薬や除草剤の使用を禁止し、用排水の分離をやめる、などといったこと

は現状では難しいです。

私の所属する杏和高校理科部では、昔からこの地方に自生していたヘイケボタルを絶滅から守るために、生物準備室内の人工飼育施設で生まれたホタルの幼虫や成虫を、近くは無農薬の実験的田んぼに放出しています(写真3 ヘイケボタルの幼虫放出)が、なかなか定着しません。ホタルが安全に棲息できる環境を広げることが今のところ難しいですが、地道に継続的な活動をしなければならぬと考えています。



写真3 ヘイケボタルの幼虫放出

田んぼは、お米を作るためだけの場所ではありません。稲を育て、生物を育て、人々に癒しをもたらす場所です。風に揺れる黄金色、群れる赤とんぼ、思い浮かべるときっと心が洗われるでしょう。田んぼだけではありません。目には見えなくてもあなたのすぐ近くに、自然があることを感じられるでしょう。

自然と人は、本来隣人のような関係であると思っています。とても身近で、認めたり、許したり。自然とは、守るべきものではなくきちんと向かい合っけて付き合っていくべき当たり前の存在だったのです。

お米は「作る」ではなく「とれる」と表現します。自然の恵みが稲を育て、人が手を加える、これが人と自然との距離の近さの一つの証であると思います。

【参考文献】

NPO 法人祖父江のホタルを守る会 HP

「田んぼの学校」入学編 宇根 豊

農林水産省 HP

水土里ネットみやぎ HP

JA たじま HP

さとのめぐみセレクトウェブショップ品品 HP